オウム真理教・早川紀代秀のこと

（『むくげ通信』303号、2020.11.29）　**飛田雄一**

1995年3月20日朝、東京地下鉄国会議事堂駅に着いた。阪神淡路大震災で被災した外国人支援のために厚生省（当時）と交渉するため来た。地上にでると救急車、パトカーが並んでいる。「地下鉄サリン事件」だ。

待ち合わせの議員会館に関係者が集まった。東京のメンバーは何が起こったのか分かってない。神戸のメンバーはみなラジオを持っていて、そこから情報を得ていた。厚生省と交渉をして、その後、記者会見をした。が、記者は、キリスト新聞と赤旗だけだったように思う。サリン事件が起こったので仕方がない。当時、被災外国人の治療費、弔慰金問題での交渉で、記者会見の様子が新聞に大きく？報道される予定だったがほとんど報道はなかった。

●

私は、コロナで腐っていても仕方ないので、「コロナ自粛エッセイ」を書いた。最初、「べ平連神戸事件の顛末」を書いた。事件といえるようなものではなく、私を含めて数人が無届デモで逮捕されたことなどを書いた。調子にのってそのエッセイを7本書いた。②阪神淡路大震災の記録、③「コリア・コリアンをめぐる市民運動」の記録、④極私的 南京への旅・ツアコンの記、⑤「青丘文庫」実録、⑥「六甲古本市」全？記録、⑦ゴドウィン裁判 初・原告団長の記。いずれも最初に「極私的」がタイトルにつく。③は、むくげ通信301号（2020.7）に再録させていただいた。

きりがないので、7本で終了とした。来年1月には、社会評論社から出版の予定だ。定価未定だが、購入希望者はぜひ飛田まで連絡をよろしく。諸般の事情で、直販もしている。

このエッセイが終わるとなぜか寂しい。「＜番外編＞オカリナ・ことはじめ」を書いた。こちらは無料、希望者には送料当方負担でお送りしている。（すべてのエッセイは、「ゆうさんの自転車／オカリナ・ブログ」に貼りつけています。）

●

「極私的 べ平連神戸事件の顛末」に書けなかったことがある。オウム真理教の早川紀代秀のことだ。彼とは、神戸大学農学部園芸農学科の同級生なのだ。やはり書いておくことが必要だと思ってここに書くことにした。

私は、1950年生まれで、1969年4月に入学した。早川は1949年生まれで学年が一つ上だが、一浪して入学した。全共闘運動のまっただ中で、大学はバリケード封鎖されていた。でもその中で園芸農学科のメンバーはクラス討論会を開いていた。私は熱心でほぼ皆出席、早川は出席率30%あるいはそれ以下か？　でも来ていた。

同級生は35名ほど、意識的なクラスで、8月の封鎖解除を決議する？集会に反対するためのデモにも半分以上？参加していたのではないかと思う。早川がそれに参加していたかどうかは記憶にない。でも35名を意識派順？に並べたら、彼は25～30番目くらいではなかったかと思う。あくまで私の主観だ。熱心ではなかったが、活動に同調していたようだ。

園芸農学科には、果樹、花卉蔬菜、育種、作物、保蔵、農業経済教室があった。私は農業経済教室だった。実験系のこの学科に、農業経済教室がなかったら、私は、おそらく中退していたのではないかと思っている。卒論のテーマは、「朝鮮土地調査事業」だった。（この6つの教室名を私が覚えている訳もなく、同級生でのちに神戸大学教授になった伊藤一幸から聞いた。後述の「A」も自信がなくなって聞いた。ありがとう。）

「造園」希望の学生もいたが、その神戸大学にその専攻はなく、希望する学生は大阪府立大学にも通っていた。4、5名だったと思うが、早川はその一人だった。

●

1995年5月16日、麻原彰晃を逮捕するための第6サティアン一帯の強制捜査が行われた。その後のかなり早い時期に立花隆が、「オウム真理教・早川革命説」をテレビで話した。左翼活動家の早川が、革命を起こすためにオウム真理教に入ったというものだった。

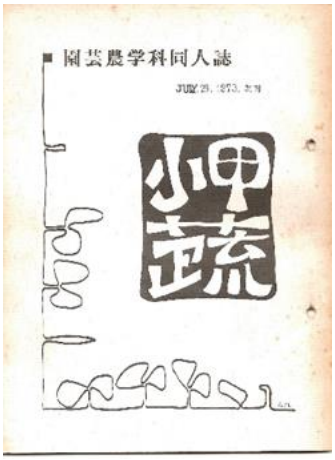
私はそんなことはない、と思った。彼がそれなりに変革に意識をもっていたとしても、それはあり得ないと思った。すぐにマスコミから同級生に取材があった。みんな一様にそれを否定した。私は、留年したのでその年の卒業名簿に名前がなく、電話がかかってこなかった。ただ一件、某教授が「それなら飛田君に聞いたら」といったことから電話があった。もちろん否定した。そして、その早川革命説は自然となくなっていった。

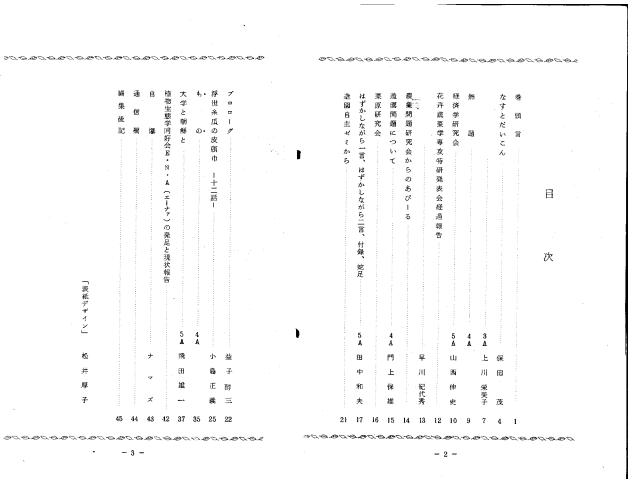
その後、同窓会で早川のことが話題となることがあった。マスコミの話題になる前に、早川からオウム真理教が熊本県で土地を確保するため（その時はその理由がわかっていないが）相談の電話があったという。すでに実業人として働いていた者への電話で、私のところにはなかった。

●

コロナ下、在日関係の本を若い研究者にあげようといろいろ整理していたら、『園芸農学科同人誌 小甲蔬（しょうこうそ）』1号が見つかった。1973年6月発行の創刊号だ。「発行・小甲蔬編集委員会／代表・益子酵三／印刷所・さくら印刷」とある。4号（1974.12）まで発行されたようだ。私も原稿を書いている。「大学と朝鮮と」（1号、1973.6）、「日本人の外国人観」（3号、1974.6）。けっこう硬派な文章だ。名前の『小甲蔬』は、編集後記によると「ちっぽけな蔬菜の芽ばえ」のことだとのこと。

その１号に早川も原稿を書いている。目次が見にくいが、「4A」とあるのは、4 が兵庫県立兵庫農科大学から神戸大学農学部に移行してから４年目、A は Agriculture 。早川は 4A と記載はないが 4A だ。私が 5A となっているのはこの時点で一年留年しているからだ。更に一年留年したので、私には同級生が、4A5A6A とたくさんいる。





早川の文章は、1200 字ほどのものだが、最初と最後の部分を紹介しておく。（と書いたが、この同人誌、発行人さえもどこにあるか分からないというものだ。貴重であろうから全文をここで再録することにする。）

●

「まずは、神大園芸農学科同人誌の刊行おめでとう。今後の前途を祝して、おそまつながら一文添えさせていただきます。今では、大阪府大緑地研究室にドップリつかっている僕ではあるが、神大での４年間でしらずと身についた「あか」と言うか、気質というものが、やはりこびりついているよう思われる。今でも、造園自主ゼミの関係で、神大へ行くことがあるが、途中、ノースポールの前を通ると、ふと我にかえったように思われる。神大から府大への状況の変化と共に、ついこのあいだまでなんの感激もなく通学してきた六甲の坂道が、何かしら語りかけてくるものを感じる。よく人々の間で、子供のころの追憶、青春の思い出といったものが、本当になつかしそうに語りあかされるものであるが、人間というものは、やはり、自分の生活史というものを背おって生きてゆくのであろう。広く人類一般においても、コンフォートが指摘するように、人類自身、原始生命以後、進化論的に発展してきた長い歴史をその内に秘めているのであり、霊長類残基を内在しているのである。しかし個人が、いやな過去を潜在意識の奥深く隠してしまうように、人類の歴史はその尊厳と名誉の名において、人類の過去を、否、内在する現在を抑圧してしまったのである。

そればかりでなく、類人猿から人類への進化を通して、人類が獲得した“原型的思考”そのままでも、近代合理主義は排斥してきたのだ。“原型的思考”は、ユングの言う“原型”やレヴィ＝フトロースの言う“神話的思考”のことであり、現在でも、オーストラリア原住民の社会に、ドリームタイム、伝説、儀式として生きづいている、初歩的であるが確実な弁証法的認識過程にもとづくものである。

北沢方邦によれば、この“神話的思考”が産業革命以後つらぬかれてきた西洋合理的思考によって、公的領域から個人的私的領域におしやられたため、社会の上部構造は、“科学的思考”の自律的カテゴリーとして個人から断絶し、文化の一方的なコミュニケーションが、上部構造を握ぎる支配者層から流がされる結果となるのである。近代資本主義の成立は、労働者を、生産諸関係の場から疎外するだけでなく、“知”である上部構造からも疎外するのである。ソピエトにみられる官僚社会主義国家においても、合理的科学思考が上部溝造を支配し、“神話的思考”をしめ出しているかぎり、個人はつねに社会意識から疎外される結果となる。そこで、個人の疎外形態を克服するためには、“神話的思考”を私的領域から公的領域まで解放し、“科学的思考”との矛盾を克服することが必須となってくる。この“神話的思考”の解放を実践する場を仮に解放空間と名づけるなら、僕は造園を仕事としていくかぎり、解放空間創造を常に念頭におき、そのプロセスをたとえ一歩でも実践してゆきたいと思っている。人間個人としては限界もあり、たいしたこともできないだろうから、理解を共にする人々と、共同することをめざしている。」

●

早川がなにをめざしていたのか、なぜオウムに入ったのかなどなど、聞いてみたいことはいろいろあるが、それはかなわない。（2018 年 7 月 6 日、福岡拘置所で死刑が執行された。68 歳）

冒頭で地下鉄サリン事件のときにたまたま国会議事堂前にいたことを書いた。実は、同年（1995 年）5 月 5 日にも東京に行ったが、そのとき「新宿駅地下トイレ青酸ガス事件」が起こっている。現場を目撃したわけでないが、新宿に泊まっていた。私はなにかオウムに因縁があるのかもしれない。

早川とは特に親しい間柄ではなかったが、学生時代には普通に話をしていた。もし事件がなければ、今でも普通に話ができているのではないかと思う。